

## 演習１：「ここがポイント」資料【進行役資料】

### 【この資料の位置付け】

グループ演習においては、グループの進行役の役割が重要となります。グループの中からその場で進行役を決める方法もありますが、虐待防止研修における事例検討のように、事例の背景や対応の方向性などを把握した上で進行することが望まれる演習については、事前に進行役を決めて各グループに配置する方法が適当でしょう。

この資料は、進行役が演習を進めるに当たって必要となる事例の背景やその後の支援体制などを整理したものです。

当然ながら、事例の背景やその後の支援体制などは演習参加者が知らない情報です。進行役はこの資料の内容を把握しつつも、初めから議論を誘導してしまうのではなく、演習参加者が「気付く」ことができるようなポイントの提示を心がけてください。

また、進行役には、それぞれに立場や専門分野があると思いますので、以下のポイントを参考に、専門分野についてはより踏み込んだポイントの提示を心がけてください。

### 【全体の進行ポイント】

基本的に、演習参加者は事前に別添の「事例」を読んだ上で、別添の「記入様式」へ事例を読んだ段階での印象（感想）を記入した状態で演習に臨みます。（事前に記入していただくかどうかは、研修実施主体の判断によります）

演習は、ケース会議の事務局担当者（市町村の障害福祉担当部署の職員）がケース会議の打ち合わせに臨む・・・というシチュエーションです。これは、都道府県が主催する研修の対象が市町村であることを念頭においたものです。

- ★ 記入してもらうテーマは２つ、ないし３つです。国研修ではトライアル版として「虐待判断」「会議参加者」の２テーマとしましたが、演習時間を確保できるようにであれば、「虐待判断」「会議参加者」「今後の見通し」の３テーマとすることを推奨します。
- ★ 各テーマの時間配分は 30 分ずつを想定しています。（最低でも 20 分は必要と思われます）
- ★ それぞれのテーマについて、演習参加者から記入した内容の「選択肢」と「選んだ理由」を発表してもらってください。発表人数は、それぞれ 4～5 名を想定しています。できるだけ演習参加者が 1 回は発言できると良いので、

同一人物を複数回指名しないようにしてください。

- ★ もし発言機会のない参加者がいた場合は、議論後の「グループ内での発表や進行役の話を聞いてみて、気付いた点を記入、記入した内容の発表」の際に優先して指名してください。
- ★ 参加者の発言に対して、参加者間でディスカッションが盛り上がるようでしたら、方向性が逸脱しない限りは見守っていただいて結構です。
- ★ 少し議論が停滞しそうになったら、下記の「ポイント」を進行役から提示するようにしてください。
- ★ 参加者からの発表の後、他の参加者に意見を求めてください。発表者とは異なる感想（選択肢）の人から発言を引き出せると望ましいです。
- ★ 割振り時間を見て、進行役から下記のポイント（のうち、議論で出てこなかったもの）を補足していただき、次のテーマに移ってください。
- ★ 国研修ではグループごとの討議内容発表を行いませんでしたが、都道府県において研修を持つ場合には、内容発表していただくことで異なる視点を共有できるメリットがありますから、できるだけ討議内容発表の時間を設けるようにしましょう。（ただし、研修時間の割振りもありますので、最終的には研修実施主体の判断によります）

#### 【進行に当たって】

今回の事例は、暴力行為や財産侵害などが明示的なわけではなく、極論すれば「どこにでもありそうな事例」といえます。障害者虐待として認定するかどうか、意見が分かれるかも知れませんが、そもそもこの程度で、姉である姉が××市に通報するのは自然なことなのか・・・など、「どこにでもありそうな事例」ゆえに参加者がいろいろな疑問や思いを持つ可能性が高いと思われます。

進行役の皆さんは、上記のような疑問や思い（1つ1つの「なぜ？」）をそのままにせず、議論の俎上に乗るような声かけを心がけてください。たとえば「どんな細かいことでも良いので、気付いた点やちょっと不思議に思った点などはありませんか？」「その選択肢を選ぶ際に、もっとこういう情報が欲しいなあ、と思った部分はありませんでしたか？」といった声かけが有効です。

ただし、いうまでもありませんが、この事例は決して「軽い事例」ではありません。家庭内におけるAさんと両親、あるいはAさんと姉の将来的な関係性などを考えると、十分に支援を必要とする事例であるといえます。こうした「どこにでもありそうな事例」にも当然ながら個別の事情があり、支援の必要性や方向性も異なります。ステレオタイプに「様子見」という結論になりそうな事例であっても、支援の必要性は潜んでいます。

こうした基本的認識を踏まえ、グループごとに議論が盛り上がるポイントは異なっているかもしれませんが、「この事例はとりあえず様子見だね」という論調（雰囲気）にはならないよう、留意しましょう。

#### 【声かけのポイント】

今回の演習は、ケース会議の事務局担当者（市町村の障害福祉担当部署の職員）がケース会議の打ち合わせに臨む・・・というシチュエーションですので、この時点で重要となるのは次の3点です。

- 1 虐待判断とその後の養護者支援に必要となる事実確認に向けて不足している情報の洗い出しと収集
- 2 ケース会議の開催に向けたメンバー選定
- 3 今後の支援にかかる見通し

以下、事例の設定部分（手持ちの事例には見えていない部分）も交えて、声かけのポイントをまとめます。

#### （虐待判断・情報収集）

おそらく、この事例を「特に虐待に当たる状況は認められない」と判断する参加者はいないと思われますが、「虐待と断言はできないが、不適切な状況」と判断する参加者は一定数存在すると思われます。

虐待判断のポイントは「自覚は問わない」「判断はチームで行う」です。

「自覚は問わない」については、親御さんが虐待しているという自覚の有無も問いませんし、ご本人が虐待されているという自覚の有無も問いません。

この事例に関しては、父の乱暴な声かけをきっかけとするAさんのパニック、母による耳つねり、羽交い絞めが認められますので、心理的虐待、身体的虐待が疑われます。ただし、虐待認定イコール両親への責任追及ではありませんので、その点は強調してください。（養護者支援を進めるに際して、養護者への責任追及を前面に押し出しても逆効果です）

「判断はチームで行う」については、ケース会議の開催が前提になっていますので、この事例に関しては心配ありませんが、くれぐれも担当者だけで判断してはならない点は、必要に応じて触れてください。また、事例の中では「担当者2名が情報収集へ出向い」ています。これも、単独行動で一人の職員が情報を判断しないという意味でポイントになります。

#### （会議参加者）

多くの参加者が、外部メンバーとして「B事業所のサビ管」、「民生委員」が選

ぶと思われます。「B事業所のサビ管」と「民生委員」が選ばれていなかった場合は、いずれも重要なキーパーソンであることを伝えてください。

B事業所のサビ管については、通所先での様子を聞くために不可欠であり、すでに聞き取り時にAさんが自分で耳をつねる様子を報告しています。民生委員については、両親と面談できない状況では近隣からの様子を聞くために不可欠であり、さらに父との関係性で接点になってもらえる可能性があります。

なお、「父」「母」「Aさん」については、現時点で会議においていただくのは困難と思われます。選んでいる参加者がいた場合は、家庭訪問も実現していない段階では呼びかけも難しいことを伝えてください。

#### (専門家の参画・警察との連携)

おそらく、多くの参加者が「その他」へのチェックがないと思われます。次のような視点の提示をお願いします。

#### 行動障害の支援に関する専門家の必要性はどうでしょうか。

この事例では、父の不適切な声かけ、母の不適切な行動抑制が虐待の背景にあります。しかし、これを一方的に責めたりやめさせたりすることは避けたいところです。そこで、発達障害の支援に関する専門家による支援を仰ぎ、より適切な関わり方を提示することが養護者支援として重要となります。

→ 資料本体 244 ページ以降を参照

#### 特別支援学校教員の必要性はどうでしょうか。

Aさんは19歳ですので、昨年までは特別支援学校へ在籍していました。高等部からの入学としても3年間は在籍していたわけですから、B事業所よりも多くの情報を持っている可能性があります。また、両親との接点もあったはずですから、両親の情報も期待できます。

#### 相談支援専門員の必要性はどうでしょうか。

Aさんには、まだサービス等利用計画が作成されていません。また、母の様子からは趣味であり息抜きである絵画鑑賞へ行けないことがイライラの蓄積につながっているようです。家族への支援を含めて、トータルなサービス等利用計画の作成が求められます。

→ 資料本体 120 ページ以降を参照

#### 警察と連携する必要性はどうでしょうか。

父の仕事内容はさておき、少なくとも威圧的な態度で訪問を拒否していることは事実ですから、今後の家庭訪問や両親との面談に際しては、警察との連携も視野に入れる必要があります。姉から家庭内の状況は知ることができるので、

ケース会議のメンバーにする必要は低いと思われますが、今後のことも考えて警察署の生活安全課へ情報提供するなどの対応は検討に値します。

→ 資料本体 192 ページ以降を参照

#### （視点の提示・その１）

なぜ、姉の姉は通報してきたのでしょうか。

もちろん、虐待防止法上は障害者虐待が疑われる場合の通報義務を課していますので、通報自体にはまったく問題ありません。ただ、家庭内で日常的に繰り返されている状況を「通報」するに至った背景には留意する必要があります。

#### ※ 事例の設定

事例の中でも、姉は両親に「何度か両親に何とかするように話し」ています。また、民生委員の情報から「近所の人Aさんが自閉症でパニックになることも知っている」ことも判明しています。

母は「Aさんに対してはできる限りのことをしている」ことから、これまでの成育歴において姉へのフォローが十分ではありませんでした。さらに、姉は「基本的にAさんには不干涉」であり、「交際中の男性がおり、自宅へ招くか思案している」ので、交際男性との関係性や近所からの目を気にする考えになったとしても不思議ではありません。

つまり、姉は交際相手や近所の目を気にして、とにかく「何度か両親に何とかするように」求めたにも関わらず、両親から「自閉症なのだからこれくらいは普通だろう」「昔からこうやってきたし、殴って言うことを聞かせているわけじゃない」と取り合ってもらえず、××市へ（本人に通報という意識はなかったかも知れませんが）通報してきた・・・という設定になっています。

#### （視点の提示・その２）

ケース会議に「姉」は加わるべきでしょうか。

この事例では姉が通報者であり、「できることなら協力する気持ちはある」「携帯電話の番号を教えるので、必要があれば連絡してもらって構わない」と意思表示していますので、ケース会議にお呼びすることも考えられます。

ただ、上記のとおり姉が通報してきた経緯については、留意する必要があります。

#### ※ 事例の設定

上記のとおり、姉はこれまでの成育歴で母から十分なフォローを受けておらず、交際相手や近所の目を気にして「何度か両親に何とかするように」求めたにも関わらず聞き入れられず通報してきた経緯があります。

こうした状況で姉をケース会議へ招き、過去の経緯や姉本人の状況を細かく聞くことは、姉自身へのストレスになるだけでなく、今後の家族関係に悪影響が及んでしまうおそれがあります。

そのため、姉については××市の職員が個別にヒアリングをして、その内容をケース会議で報告するようにした・・・という設定です。

特に姉に関しては、もし姉の心情を理解せずに悪い意味で様子見にしてしまった場合、現在は「基本的にはAさんには不干涉」な姉が、Aさんや両親に対して非常にネガティブな感情を持つようになってしまい、Aさんや母に対する暴言や無視などが激しくなり、将来的には成年後見人など、Aさんの権利養護者となることが期待された姉が、逆に養護者虐待リスクを抱える人になってしまいう、という設定にもなっています。

#### （視点の提示・その3）

Aさんのパニック収まらないと母の対応がエスカレートしてしまう理由は何でしょうか。

母はAさんがパニックになった際、耳をつねって行動を抑制しようとし、収まらないときには「耳を思い切りつねったり、後ろから羽交い絞めにしたりして、おとなしくなるまで止めない」状況です。

「重要な気分転換、息抜きとなっている韓流スターのコンサートや舞台鑑賞」へ行けなかったときなど、イライラしている時に抑制が激しくなっている可能性もありますが、毎回のように力づくでも抑えようとしている点には留意する必要があります。

#### ※ 事例の設定

Aさんのパニックは、基本的に父の「Aさんへ直接的な暴力を振るうことはないが、声かけは乱暴」という関わり方が引き金となっていることから分かります。父は直接の暴力は振るわないものの、乱暴な声かけ、怒鳴るなどの状況があります。また、「以前はAさんのパニックを力で抑えようとしたり、パニックを止められない母へ暴力を振るったりした」過去もあります。

姉は基本的に不干涉なので父の怒声はうるさいだけです。母に関しては、Aさんのパニックを抑えられないことが、さらなる父からの暴力を招いてきた経緯があるため、長年の習慣で静かになるまで行動抑制してしまう・・・という設定です。

#### （視点の提示・その4）

Aさんは両親や姉へ気兼ねしていないでしょうか。

Aさんは、事業所での聞き取りで両親や姉のことにに関して、父については「い

つも怒っている。でも良く外へ連れてってくれる」、母については「いつも優しい。ときどき怒る」と語っており、これは概ねこれまで集められた情報と一致します。

ところが、姉については「優しい。いっしょに遊んでくれる」と語っているにも関わらず、姉自身はAさんに対して不干渉だと語っている点には留意する必要があります。

#### ※ 事例の設定

姉からの情報では、「基本的にAさんとは不干渉」となっていますが、一方で「交際の男性がおり、自宅へ招くか思案して」いたり、近所からの評判を気にしたりして「何度か両親に何とかするように話し」、それが受け入れられないと判断して通報に至ったわけですから、当然ながらAさんに対しても、単なる不干渉というよりも、分かるように邪魔そうな態度を取ることがあります。

そうした姉の態度を感じたAさんは、姉へ気兼ねして、「優しい。いっしょに遊んでくれる」と答えるようにしている・・・という設定です。

このほかにも、「逆に両親の良い面を探してみてください」とか、「父が威圧的になってしまった背景は何でしょう」などの声かけも考えられますし、進行役の専門分野を活かして、ここまでに挙げた以外にも検討の視点を提示してみましょう。

今回の国研修では「今後の見通し」を取り上げませんでしたが、都道府県研修においては取り上げることも想定されます。  
また、進行役としては事例の最終的な見通しを把握しておくことも重要ですので、以下の内容も参考としてください。

#### （今後の見通し）

今回の演習では、養護者を一方的に責めるのではなく、擁護者支援や支援基盤整備を軸とした見通しを持つことについて気づきを得ていただくことを主眼に置きます。

まず、記入様式において「そもそも虐待事案として位置付けるには至らない」という選択をした参加者がいた場合には、しつこいようですが虐待判断のポイントは「自覚は問わない」「判断はチームで行う」ということを伝えてください。  
また、「深刻な事態になる前に親子分離を図る」という選択をした参加者がいた場合には、本人が（虐待の認識の有無には疑問が残るものの）家は楽しい、ず

っと家で暮らしたいという意思表示をしている以上、現時点では尚早な判断であることを伝えてください。

おそらく、多くの参加者は「両親と面談し、事実であれば耳をつねるなどの行為をやめさせる」という選択をすると思われます。その場合には、下記の視点と具体的な取り組み案の提示をお願いします。

#### （視点の提示・その5）

##### 安易に家族を責めない視点、養護者支援の視点

この事例は、身体的虐待（耳をつねる、羽交い絞めにする）や心理的虐待（パニックを引き起こすような乱暴な声かけ）が疑われます。ただし、事例からも分かるとおり、意図的に行っていることではなく、行動障がいのあるAさんへの関わり方が不適切であることが背景にあります。このような場合、起きている状況だけを捉えて安易に家族を責めても意味がありません。

家庭内における虐待事例は、多くの場合「障がい特性への理解不足」や「福祉サービスや相談支援をはじめとする支援の不足（養護者の孤立）」が背景にありますので、今回のような事例を手がかりに、地域全体の虐待リスクを軽減させていく取り組みが重要であることを伝えてください。

今回の事例でいえば、次のような取り組みへつなげていくことが考えられます。

##### 専門家の支援を得ながらの養護者支援

「障がい特性への理解不足」に対しては、専門家の支援を得ることが重要となります。この事例では、両親に行動障がいの特性を理解してもらう必要があるわけですから、行動障害の支援について知見を有する者や、専門の研修を修了した者などへ養護者支援を依頼することが考えられます。また、都道府県・政令市には「発達障害者支援センター」が設置されていますので、同センターから、保護者に理解できるような、家庭で実践可能な関わり方を伝えていくことも考えられるでしょう。

ただし、その前提として両親とコンタクトを取らなければなりません。民生委員さんが父との関係性で窓口になっていただける可能性がありますので、両親に「取り調べられている」という誤解を与えないようなコンタクトの取り方を検討する必要があります。

さらに、姉へのフォローについても留意する必要があります。交際相手のことや近所からの評判などを気にして、両親へ対処を求めたにも関わらず拒否された結果として通報してきたわけですから、通報に至った背景を踏まえて今までの気遣いを慰労するなど、Aさんや両親への悪感情が増大しないようなサポートが必要です。



また、母については趣味であり息抜きであるコンサートや舞台鑑賞へ行けないことがイライラの蓄積につながっているようですから、自分の時間を楽しめるようなサービス利用の提案など、養護者支援の視点も求められます。

#### 短期入所などの資源整備、支給決定の運用改善など

××市は、全国的にみると平均的な市町村といえます。支援事業所が不十分で、相談支援事業所の整備も遅れており、短期入所の支給決定運用を「緊急時に限る」としている地域は決して珍しくありません。ただ、そのこと自体を責めても始まりませんから、障害者虐待防止法の規定（※）に基づいて、虐待事例への対応を通じて短期入所や相談支援などの資源整備や、息抜きの利用（支給決定の運用改善）の促進などを進める必要があることを伝えてください。

また、息抜きのサービス利用という観点からは、行動援護や移動支援などのヘルパー系サービス、あるいは日中一時支援などの一時預かり系サービスなども想定されます。いずれにしても、Aさんにはサービス等利用計画を作成する必要性が高いという認識を共有し、家族支援を含めたトータルコーディネートを考える必要があります。

#### ※ 障害者虐待防止法 第4条

（国及び地方公共団体の責務等）

国及び地方公共団体は、障害者虐待の予防及び早期発見その他の障害者虐待の防止、障害者虐待を受けた障害者の迅速かつ適切な保護及び自立の支援並びに適切な養護者に対する支援を行うため、関係省庁相互間その他関係機関及び民間団体の間の連携の強化、民間団体の支援その他必要な体制の整備に努めなければならない。

2 国及び地方公共団体は、障害者虐待の防止、障害者虐待を受けた障害者の保護及び自立の支援並びに養護者に対する支援が専門的知識に基づき適切に行われるよう、これらの職務に携わる専門的知識及び技術を有する人材その他必要な人材の確保及び資質の向上を図るため、関係機関の職員の研修等必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

#### 【最終的にこの事例はどうなるのか（事例の設定）】

この事例はあくまで架空事例ですから、最終的な見通しは研修主体が自由に設定することも可能ですが、今回の前提である「ケース会議」において決定された方向性は、次のとおりです。

#### ★ 養護者支援

- ・ 民生委員がキーパーソンとなり、家庭訪問を実施する。姉からの通報であることは伏せた上で、時折Aさんが大きな声を上げていることを相談された旨を伝達する

- ・ 今回の主眼は養護者支援のため、その場で両親から虐待の認識を求めることはせず、その後の養護者支援への了解をいただく点を重視する
- ・ Aさんのサービス等利用計画の作成を提案し、その中で現行のB事業所の利用だけでなく、母の息抜きも含めた短期入所や日中一時支援、行動援護（移動支援）などの活用を盛り込んでいく
- ・ 両親に対する障がい特性理解に関しては、サービス等利用計画を作成する相談支援専門員から提案し、具体的なプログラムは発達障害者支援センターなど、自閉症や行動障害のアドバイスがもらえる機関の協力を得ながら策定する
- ・ その内容は他の養護者に対しても有効となるため、一般化した上で、広く自閉症や行動障害の子どもを育てる保護者や支援者向けの研修会などで活用する
- ・ また、同様の事例は他の世帯でも考えられることから、家族同士が気兼ねなく思いを話すことができる場の設置や、養護者に対する「子離れ」を支援するワークショップの実施などを検討する

#### ★ 姉へのフォロー

- ・ 家族が通報者であるということを鑑みて、Aさんや両親には姉が通報者であることを伏せる
- ・ 姉からの話を聞く担当者を置き、姉がこれまで感じてきた両親への不満やAさんへのネガティブな感情を受け止める

#### ★ 支援基盤の整備（支給決定の運用改善）

- ・ 当面の対応として、短期入所の支給決定ルールを見直し、家族の息抜きの利用であっても支給決定可能とする
- ・ 行動援護、日中一時支援については、障害福祉計画に整備を明記するなどして事業所整備を図る。整備されるまでの間については、移動支援事業を活用する。また、これらのサービスについても、家族の息抜きの利用を可とする

こうした取組みを一気に進めることは難しいと思われませんが、まずは両親への支援や姉へのフォロー、短期入所の支給決定ルールの見直しなど、すぐにできる取組みを着実に進めることが重要です。

この事例では、両親への支援や姉へのフォローへ取り組んだ結果、Aさんに対する両親の関わり方が適切になり、家庭内でのパニックは非常に少なくなりました。それにより姉の思いがある程度満たされただけでなく、母が姉に対して関わる時間を増やすことにもつながり、交際中の男性も自宅へ招くことがで

きました。姉は引き続きAさんと積極的に関わりはしませんが、ことさらに避けることもなく、必要であれば一緒に留守番するようになっています。(姉は大学卒業後、一人暮らしするため自宅を出ていきます)

一方、××市では保護者（支援従事者）に対する子どもの障がい特性理解の研修会や、家族同士が気兼ねなく思いを話すことができる場などを定期的に行うなど、養護者支援（支援者支援）に力を入れるようになりました。

#### 【演習の終わりに】

演習の最後には、進行役からまとめのあいさつを入れることも考えられます。その際には、演習の意図として「さまざまな視点から多面的に捉えていくことがチーム対応のポイント」であることを体感してもらうことがあった点を踏まえ、いろいろな立場の人が、それぞれの視点に立って議論したこと自体が演習成果であったことを触れても良いでしょう。

以 上